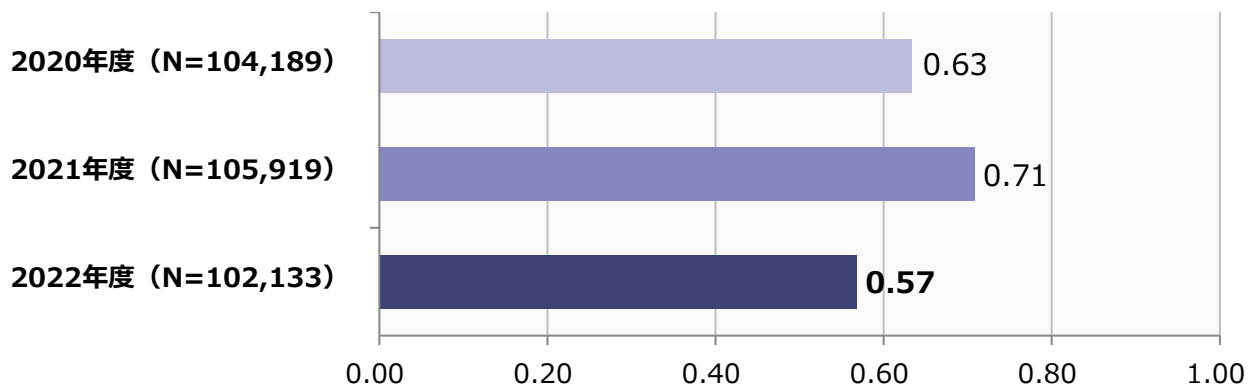


MRSA（メチシリン耐性黄色ブドウ球菌）新規発生率

MRSAは医療関連感染を起こす代表的な菌であり、その新規発生（院内伝播）を低減することは院内感染対策を行っていく上で非常に重要になります。

現在、医療関連感染対策委員会の検査部門で報告が挙がっていますが、今後QIでも発生動向を定期的に捉え、発生率の推移を確認し感染対策の質の評価につなげていければ良いと考えます。

新規発生率を低減させるためには、手指衛生や適切な器具の取り扱いを徹底し汚染された手指や器具を通しての接触伝播を予防する取り組みが必要となります。



当院値の定義・算出方法

分子： MRSA発生数（持ち込み症例は除く）
分母： 在院総患者数

$$\frac{\text{分子}}{\text{分母}} \times 1000 \quad (\%)$$

※入院後、48時間以降に採取された培養検査からMRSAが検出された場合にカウントしています。

※「‰（パーミル）」はパーセントの10分の1を示す単位です。

改善策について

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、職員の手指衛生を含めた標準的な感染対策の実践に繋がったと考えます。

以下の耐性菌対策をより強化し、さらなる伝播数の低下を目指します。

耐性菌をひろげない →感染制御チーム（ICT）による耐性菌患者の監視と週1回の環境/耐性菌ラウンドを実施、予防策の実施状況の確認する。

耐性菌をつくらない →ICTコア会議で広域抗菌薬と抗MRSA薬の適正使用についてカンファレンスを実施し介入する。

耐性菌をもちこまない →他院からの転入時に、スクリーニング検査（各種培養検査）を確実に実施し、保菌患者の把握に努める。

文責：ICT（Infection Control Team:院内感染管理チーム）
感染管理認定看護師：末永 健二